

特定非営利活動法人 日本免疫学会
平成 25 年度前期 **Tadamitsu Kishimoto International Travel Award**
研究発表報告書

申請者氏名	郭 子進	会員番号	0026617
申請者の所属・職名	理化学研究所統合生命医科学研究センター 粘膜システム研究グループ 研究員		
出席会議名	Food Allergy and Anaphylaxis meeting2013		
発表論文タイトル	Involvement of PAF metabolism in anaphylaxis and prevention by Rush-SOTI		

実施結果:

この度、Tadamitsu Kishimoto International Travel Award を賜り、誠にありがとうございます。岸本先生をはじめ、推薦者である辻典子先生、そして選考委員、事務局の先生方に心よりお礼を申し上げます。私は2013年2月7日から2月9日まで、フランスのニースで開催された Food Allergy and Anaphylaxis meeting2013 (FAAM2013)に参加し、口頭発表を行いました。

FAAMはEuropean Academy of Allergy and Clinical Immunology (EAACI)が主催する会議の一つです。名前の通り、食物アレルギーとアナフィラキシー治療を中心に、基礎や臨床の研究を発表できる会議で、今回の一番大きなテーマは経口減感作法による食物アレルギーの治療法でした。学会初日のシンポジウムはその原理である経口免疫寛容メカニズムや現在臨床で応用されている経口減感作法に関するレビュートークと発表が殆どでした。私が行っている研究にかなり近い内容で、興味のある情報がたくさんありました。二日目からは食物アレルギー発症メカニズムに関する発表がメインでした。その中で私が興味をもったのはプロバイオティクスとアレルギー発症の関連性についてのセッションです。近年、常在菌の変化でアレルギー体質になりやすいという仮説も提唱されています。実際、抗生物質の長期投与で、血中IgE値が上がるという臨床知見もあります。また、無菌マウスではIgE産生が増加するという研究データもあります。常在菌による免疫システムへの影響はアレルギー発症メカニズム研究においてこれから大きく注目されるのではないかと思います。

私は食物アレルギー臨床治療によく使用されている急速経口減感作法をアレルギー動物モデルに再現し、その治療メカニズムに関する研究を行っており、学会最終日の三日目に「Involvement of PAF metabolism in anaphylaxis and prevention by Rush-SOTI」という題名で発表を行いました。このような専門的な学会で発表することは貴重な経験でした。そこで頂いた意見やコメントをこれからの研究に生かしていきたいと思っています。

EAACI は毎年アレルギー疾患に関する数多くの学会を開催するので、機会がありましたらまた別の会議にも参加してみたいと思います。